

■ 書 評



関係の病としての おとなの発達障害

小林隆児 著
弘文堂
2018年7月 232頁
本体価格 3,200円+税

著者は、ライフワークとして自閉症をはじめとする発達障害の臨床研究を行い児童精神医学領域で数々の著書を執筆、現在でも診療に携わっている。その経験を通して、子どもが親に対して示すアンビバレンスな情緒不安定性に着目し、母子関係のなかでの動きと同質の動きが患者-治療者関係のなかにも再現されると述べている。精神病理学で「間」と聞くと木村敏の著書が頭に浮かぶ。精神障害は「間の病」であり、発達障害も「関係」を抜きには語れないことは納得がいく。ADHDに対する薬物療法が行われるようになり、また学校を卒業し就職してから社会に適応できず、はじめて発達障害の存在に気づかされることが多くなり、大人の発達障害に対する社会の関心も高い。インターネットの情報を基に自ら進んで受診するケースもみられ、児童思春期の専門家でも発達障害の診療からは避けられない状況である。

操作的診断基準やガイドラインを使用する時代になってから育った世代の医師はもとより、研修医ですら、コミュニケーション障害、空気が読めない、相手のおかれている状況が把握できない、ノンバーバルなコミュニケーションの障害、常同的で反復的な動作、融通の利かない執着、白黒と両極端でしかとらえられないなどの特徴があれば、すぐに発達障害の診断を疑うことができる。

これらの症状は障害の表層であり、本質を理解した上での診たてをしている訳ではない。著者が言う「関係をみず、個を見ているのみ」である。本書では、発達障害の存在をしっかりと見極めるた

めには、患者が表出する症状のみにとらわれずに、家族や治療者との間で生じる関係性に着目することの重要性を説いている。

「コミュニケーション障害」を健常者からの一方的な見方で論じている書籍が多いなか、発達障害を患者と健常者の双方の中で生まれる問題ととらえることは、重要な視点であろう。発達障害をコミュニケーションの問題、協調性の乏しさ、一人遊びなどの縦断面の症状を寄せ集めて診断することの危うさに警鐘をならしている。

発達障害の治療にあたって筆者は、「関係」の中で生じたのであれば、「関係」を通して治療を行うことの必要性を強調している。そのためにも、治療者は傍観者や間接者ではなく、一步踏み込んで関係者としての役割を担うべきである。洞察を深める精神療法が全ての発達障害において有効とは著者も断言していないが、タイミングを見計らって、アンビバレンスの存在を患者にわかるように取り上げて気づいてもらうようなアプローチを紹介している。

本書は、全8章からなり、前半の4章までは幼児期の発達障害の病理について著者の持論を踏まえた詳細な記載がなされ、小児精神を専門としない読者にとってもありがたい情報を与えてくれる。図や症例を交えることで、理解しやすいような工夫もなされ、最終章では、2例の大人の発達障害を提示し、面接場面での機微なやり取りが手に取るようにわかる。実際の臨床でどのような点に気を付けて面接しなくてはならないかについての手がかりとなるであろう。

発達障害でもいろいろなタイプがあるが、本書では特に限定されておらず、個々の発達障害について知りたい読者にはやや物足りなさを感じるかもしれない。著者の次なる書籍の上梓が待たれる。

まずはともあれ、発達障害の大人に対して、薬物療法以外のアプローチが求められる現代では、是非とも一読しておきたい書と言えよう。

(忽滑谷和孝)